

# 第六章 権力の未曽有の擧げをうけ、社共の腐敗と武装蜂起主義者の盲動をのりて、十一月佐藤訪米を暴力で阻止せよ！

「10・21」のおおむねの通り、社共既指下部の腐敗と盲動、そして空前絶後の武装蜂起主義者の大破産と敵前逃亡。

全学連三千の新宿最先端での衝動たる武装斗争の貫徹。指し示めされた「10・21」は、今や、佐上訪米阻止をめぐり日本階級斗争とりわけ学生戦線において、その生み出された直接的現象とその結果において、極めて激しい再編成の動きを始めている。

それは、一者において「社共共闘」の敗北が、見出し得たこと、即ち、共産党は、共闘当日において、一切の抗議斗争すら展開し得ないうちに、至っていると同時に、部派差での大敗北を喫した社会党は、この機会にと、十六日「沖繩闘」主催の集会をマニラに上げ、それに由緒未定において「全国反共」と「平暴」への正式参加を請うたといえども、自らの「栗田」へと押し込み、斗争放棄した共産党への対策をなさんとしていているのである。しかしながら当然にも、総評指下部、山立野郎からの反撃をうけるを得ないものである。すなわち、予定されている11・13よりも、今回の総評には政治目標だけで統一ストを打てるほどの力はないと、ほとんどの組合が賃金や合理化、時短などを中心とした斗争とらえざるを得ないものであつて、この現象の由に既指下部の反安保斗争の腐敗と暴動の予兆を、同時に、そのした盲動を直接的根拠として、「反安保反共青年校」の根上げは、当初11・9集会と予定されるが、しかし、当日の集会での参加者の激減と同時に、活動と同じの自治労、全学連、東本府なども青年部の激しい反対の面に、内容的にも貫徹できず、むしろに挫折せざるを得ない。こうして、反共青年委員会への共闘的青少年労働者の反撃から始まる防江セオにはおれない、ロートルどもの危殆を懸念するからに他ならない。

他方、武装蜂起主義諸集団の「10・21」のあえらば破産とその武装蜂起ボラツキ宣伝集団としてその極左スラフキスト的方針の非「現実性」が顕微鏡にうつると同時に、十七日を目前に控えて「斗争を要し振舞うべき力量を疑しうるとどう力

つし、ガキ的に体制を打ち倒さざるを得なくなつていているのである。わが全学連「日大反共学生会議」の、「10・21」総括論争の提題「ローエフナー」NO3-4の、そして「総括集会」の果現を克ちることによる、その深化の前に、完全に瓦解せざるを得ず、その大破産を、現実的な破産にまで、その系譜は「深化」しているのである。また、理工学部反共学生会議の諸君の手によつて、その左翼的革命的果現を克ちつた。理工学部学生会主催「五学部合同安保沖繩討論集会」において、その武装蜂起ボラツキ宣伝集団以下的にふるまうことによつて、かくもわが理工学内革命的左翼的諸友が、この急求を回避せんとする理工反共会議中核派日和良主義者の諸君たちの「10・21」斗争総括を回避した小細工はその発言を余中で傾倒せざるを得なく、あえらば破産を学生大衆の前に露呈したことにそれは徹底的にのりて、いられるのである。すなわち集会が「10・21」総括を深化し、安保・沖繩斗争論争の深化を克ちとり、かつ目前に控えた佐上訪米阻止斗争を、理工学部の庄什曲、左翼的大衆を組織化するという討論集会であつた。

そして、「10・21」再び帰ることなき決死行へ出陣せよ」と叫びついでいたMシ派は、神田田代リウと深夜新宿モクリコ三ましか、急すことが出来なかつたのである。そして「帰つてきた日和見分る連」は、日大反共学生会議三百の秘録を見るや、「もつ、どうしようもない」といふこと、その挫折感を吐露せざるを得ない。そのシヨールモ一更を露呈しているのである。全国SFシ書記長であり、そしてSFシ内日和見分るS君、君の事後無断反論とは、諸君たち武装蜂起ボラツキ宣伝集団の言葉にうつらばつた。「日和良主義的にふるまつてかかる危殆の時代にはただきつがされる」と。これをめつてS君のプラクイア症、反共主義的痴病の症候群による兼病入院に際しての「帰ることなき決死行」へのおめがれの言葉としよう。

反共学生会議の諸君、そして読者諸君、わが武装蜂起ボラツキ宣伝諸集団とわが、中核派、Mシ派の空前絶後の大破産と敵前逃亡は、